

八久保先生へのお詫びと感謝

三星 宗雄

最近帰宅するのが遅く、自分の研究室がある建物のシャッターが閉まる時間を過ぎることが多い。そのような時必ず八久保先生のお部屋の前を通る。今でも名札が掛かっており、天窓を通して室内のダンボールの箱が見える。この部屋の元主はそれらのダンボールの中の資料を駆使して、新しい研究成果を生み出そうとされていたに違いない。それを思うとこの部屋の元主の無念さが伝わってくる。ダンボールも今や居場所がなくなつた。誰か引き取って、八久保先生の臓器とも言ふべきそれらの資料をどこかで再生してくれる人が現れるのを祈るばかりである。

私が平井先生から追悼の言葉を依頼されたのは、学内の共同研究プロジェクトで一緒に活動し、このプロジェクトの成果出版物が八久保先生の遺作となったからである。しかしそれをさしおいても八久保先生には大変お世話になった。八久保先生は共同研究のテーマの中で景観の問題をご担当された。われわれ横浜に住む人間には中華街というと横浜中華街を思い浮かべ、わが国にはそれ以外にはないか、せいぜい神戸の中華街を思い浮かべるくらいである。しかし実際には那覇をはじめとして、福岡や長崎など九州各地に、その跡地を含め、

見られるのである。先生は多くの美しい写真とともにその景観の特徴やその歴史について教えて下さった。恥ずかしながら私は先生の論文で初めて固有名詞として、なぜ「中華街」ではなく、「横浜中華街」なのを知ったのである。

先生は国内だけでなく、韓国へも足を延ばされ、ソウルの中華街についてもご紹介下さった。先生は韓国へは何度も足を運ばれ、大きなテーマの下に研究を進めておられたようだ。それも今や灰燼に帰した。あのダンボールの中身はその資料なのかも知れない。

先生には何度も韓国に誘われた。それは私が景観を色彩心理学的な立場からアプローチしていたからである。先生はご専門が人文地理学で、景観をその地における産業構造との関連で捉えておられた（と、私には思われる）。一方私は景観をイメージとして切り離し、その絵画的な美醜について考えていた（と、私には思われる）。色（色彩）が持つ効用は「（表面から見えない）内部の状態を示す」ことである。内部の産業構造が変われば、それに伴って（表面の）景観も変わる。それがちようと色（色彩）の持つ効用と似ていると思っていた。それを八久保先生にお話する矢先であった。韓国への旅は結局実現しなかった。韓国の地でそんなことを話していたら、と今更ながら思う。ごめん、八久保先生。

もう一箇所、誘われた場所がある。それは私のふるさと会津若松である。会津若松が酒造の産地であったからである。先生はわが国における地場産業としての酒造産業の構造の解明に全力を傾けておられた。会津若松市内だけでなく会津一円の酒どころは委細もろさず熟知されていた。どの酒が一番自分の口に合うか、どこで利き酒をさせてくれるか、次から次へと地元の私にも分からない大小の銘柄が出てきて舌を巻いた。いつか

私の実家に泊まっていたとき、私のふるさとを「案内していただく」ことになっていたが、これも果たせなかった。八久保さん、ごめん。

八久保先生はさすがに地理の先生だけあって、地理的な感性が人一倍鋭かった。先生は肥後は熊本のご出身である。肥後もつこすである。私は会津っぽである。どちらも頑固者である。私はそういう会津っぽ氣質が嫌でたまらなく、なるべく「軽く」生きようとしてきた。会津っぽのことなど忘れていた。しかし九州の人は違った。ある時、ある事に対してとった私の態度に、八久保先生に「やっぱり会津の人だ」と指摘された。思いも寄らなかつたご指摘であつた。先生に指摘されて、あらためて自分を見た。酒の地理的な分布だけでなく、こうした人間性の分布まで先生のデータベースには入っていた。

何年か前に、八久保先生の文章が人間科学部の推薦入試問題として出題された。「もし友を選ばば」という内容であつたと思う。地理の先生らしく、自分ならなるべく遠くから来ている友を選ぶ、と書いておられた。私は八久保先生のおかげで自分のふるさとから千キロ離れた九州の人々の人間性を知り、九州という地について、その歴史について、その色彩について学び始めた。それ以来私は数度九州に足を運んだ。八久保さん、有難う。最後に、本当は一番お伝えしたいことだが、そういうことは軽く言おうと思う。先のある事で、私がとった態度云々には続きがあつた。「先生、分かっているよ」と言つて下さつた。有難う、八久保先生。

この夏は暑い日が続く。今でもあの図書館脇の細い道をページジュの上着に身を包んで、汗をかきながら、えくぼの八久保先生がやって来そうだ、こう言いながら。「先生、暑いッスね」。さようなら、八久保先生、肥後もつこす。